

慣用句の意味推測における透明度要因に関する一考察 —身体部位詞を含む慣用句を例として—

王 雪 瑶*

A Study on Transparency of Inferences to Idiom: In the Case of the Idiom Which Contains the Names of Body Parts

WANG Xueyao

Abstract

This study analyzes the semantic extension of idioms using word-level semantic extension and phrase-level semantic extension to examine the transparency of idioms. The results show that the type of semantic extension of idioms affects the judgment of the transparency of idioms and the inference to the meaning of idioms. Idioms that involve only word-level semantic extension tend to be judged as highly transparent, while the greater the number of times semantic extension is performed, the greater the degree of semantic extension tends to be judged. In addition, the greater the degree of semantic extension, the harder it is to guess the meaning.

Keyword : inferences to idiom, transparency, semantic extension of idioms, word-level semantic extension, phrase-level semantic extension

1. はじめに

第二言語（以下 L2）教育においては、語彙項目より、文法項目を重視する傾向が見られる（森山 2017）。私たちの言語生活ではよく慣用句に遭遇するが、慣用句はどちらかと言えば語彙項目として扱われることが多く、外国語の授業で費やされる時間が少ない。その結果、L2学習者は授業で慣用句を勉強するのではなく、授業外の言語生活の中で付随的に勉強することになり、自ら慣用句の意味を推測することも多い。

慣用句は複数の構成要素を持ちながら、句としての意味は構成要素を組み合わせた意味から逸脱し、導き出せないものと定義している（国広 1985, 榎山 1997）。例えば、「頭に来る」という慣用句は、「頭」と「来る」という二つの構成要素から構成されるが、「頭」と「来る」の意味がわかっても、必ずしも「怒りで興奮する」という慣用的な意味が推測できるとは限らない。そのため、慣用句の意味推測は必ずしも容易ではなく、慣用句の構成要素を組み合わせた文字通りの意味と慣用的な意味の間の関連性に影響されると考えられる。

以上を踏まえ、本研究は慣用句の文字通りの意味と慣用的な意味の間の関連性が慣用句の意味推測に与える影響を明らかにすることを目的とする。

キーワード：慣用句の意味推測、透明度、慣用句の意味拡張、語レベルの意味拡張、句レベルの意味拡張

* 令和2年度生 比較社会文化学専攻

2. 先行研究

2.1 慣用句の意味成立に関する先行研究

元来、慣用句の意味はその構成要素の意味に分解不可能な表現とされ、文字通りの意味と慣用的な意味の関係は恣意的であるとされる (Gibbs, Nayak & Cutting 1989)。しかしながら、靱山 (1997) によると、慣用的な意味が構成要素の文字通りの意味から逸脱する慣用句であっても、隠喩 (メタファー)、換喩 (メトニミー)、提喩 (シネクドキ) などの比喩に基づいて慣用的な意味が成り立つ。例えば、「手を上げる」という慣用句は「殴る」という慣用的な意味を表すが、文字通りの意味である「手を高くする」という行為は「殴る」という行為の前に発生し、この二つの行為は時間的に隣接する。つまり、「手を上げる」という慣用句の「殴る」という慣用的な意味は隣接性に基づくメトニミーによって、「手を高くする」という文字通りの意味から拡張している (有菌 2014)。

また、伊藤 (1999) は慣用句の構成要素の意味と慣用的な意味の関係を目を向け、その慣用的な意味の成立する過程、また、その過程にはどのような要因が関与しているかに着目し、慣用句の表す意味について考察した。慣用句の慣用的な意味の成立は、「構成要素の比喩性」によるもの、「慣用句の具象性」によるもの、それら両要因によるものに分けられる。表1は筆者が伊藤 (1999) に基づいてまとめたものである。

表1 慣用句の慣用的な意味の成立要因

要因	例
構成要素の比喩性	鼻が利く
慣用句の具象性	目を丸くする
構成要素の比喩性+慣用句の具象性	目から鱗が落ちる

第一の「構成要素の比喩性」による慣用句は、慣用句の構成要素として用いる要素が比喩的意味で用いられ、それが慣用的な意味の中核的役割を果たしている。例えば「鼻が利く」という慣用句の慣用的な意味は「隠し事などを鋭く感じ取る、利益の得られそうなことに敏感である」である。この慣用句の場合、構成要素の「鼻」は機能類似に基づいてメタファー的に拡張し、拡張した「ある事柄を敏感に感じ取る器官」という意味は「鼻」の元々の意味とかなりかけ離れた意味で、それが慣用句の意味の中核となっている。

第二の「慣用句の具象性」による慣用句は、慣用句の構成要素を組み合わせた文字通りの意味が示す具体的状況に基づいて慣用的な意味が生まれる。例えば「目を丸くする」という慣用句の慣用的な意味は、文字通りの「目」を「丸くする」という意味、すなわち、「目の形を大きく変化させる」という具体的状況 (具象性) に基づいている。目が通常よりも大きく見開くのは驚いた状況に置かれたからであるという因果関係から、「びっくりして目を大きく見開く」という慣用的な意味にメトニミー的に拡張する。

第三の「構成要素の比喩的意味」と「慣用句の具象性」の両要因による慣用句は、「目から鱗が落ちる」という慣用句が例として挙げられる。この慣用句は、「鱗」を「見ることの邪魔をするもの」と比喩的に捉え、シネクドキによって「問題の解決を阻んでいた要因」という意味に拡張している (構成要素の比喩的な意味)。同時に、「見ることの邪魔をしていたものが目から落ちること」という具体的状況 (具象性) からの特徴類似により、「見えなかったものが突然よく見えるようになる」という意味にメタファー的に拡張し、「解けずに悩んでいた問題を解決する糸口が、ふとしたきっかけでつかめる」という慣用的な意味が成り立つ。

以上のように、慣用句の慣用的な意味の成立は恣意的なものではなく、「構成要素の比喩性」と「慣用句の具象性」が深く関与しており、「構成要素の比喩性」によるか、「慣用句の具象性」によるか、あるいはそれら両要因によるかの三つの場合に分けられる。そして、慣用句の構成要素か句全体かがどのように慣用的な意味に拡張するかは、メタファー、メトニミー、シネクドキという比喩によって動機づけられる。

2.2 慣用句の透明度に関する先行研究

「1. はじめに」で述べたように、慣用句の慣用的な意味は構成要素の意味を組み合わせた文字通りの意味から逸脱している。そのため、慣用句の文字通りの意味から直接慣用的な意味を導き出すことが困難で、二つの意味の間の関連性によってその難易度は異なってくる。

慣用句の文字通りの意味と慣用的な意味の間の関連性は「透明度」として表されることが多い。この二つの意味の間の関連性が高い慣用句は透明度が高く、関連性が低い慣用句は透明度が低いとされる (Nippold & Taylor 2002, Ishida 2009)。また、この関連性は言語話者の感覚によって判断される (陳 2016)。

Ishida (2009) は日本人英語学習者を対象者として、慣用句の透明度が意味理解にどのような影響を与えるかについて考察した。その結果、透明度が慣用句の意味理解に影響を与え、透明度の高い慣用句は意味理解しやすく、透明度の低い慣用句は理解しにくいことが明らかになった。しかしながら、Ishidaが使った意味推測テストの質問には未知語の前後に書かれた文脈が提供されており、対象者がこれらの文脈を用いて慣用句を理解した可能性がある。このようなことからIshidaは、必要な文脈があれば、慣用句の透明度にかかわらず意味理解の成功率は高くなったと考えた。

王 (2021) は中国人日本語学習者を対象者として、Ishida (2009) と同じく透明度要因が慣用句の意味推測に与える影響について考察した。Ishidaで見られた文脈の効果をなくすため、意味推測テストでは文脈なしの質問紙を用いて調査を行った。その結果はIshidaと同じく、慣用句の透明度が慣用句の意味推測に影響を与えていた。しかしながら、詳しく見ていくと、透明度の高い慣用句に属する対象項目の中に、比較的正答率が低いものが存在し、逆に、透明度の低い慣用句の中に、比較的正答率が高いものが存在していた。つまり、透明度だけでは説明しきれない対象項目があることがわかった。

以上のように、透明度要因が慣用句の意味推測に与える影響についてはほぼ一致した結果が見られたものの、その議論は透明度の影響があるかないかにとどまり、各慣用句とその正答率との関係をより詳細に分析することは行われていない。

先行研究の章をまとめる。「透明度」とは、慣用句の文字通りの意味と慣用的な意味の間の関連性を指す (Nippold & Taylor 2002, Ishida 2009)。句全体の文字通りの意味がメトニミーなどの比喩を通して、慣用的な意味に拡張する。しかしながら、伊藤 (1999) によれば、慣用句の意味生成に関わる要因は、構成要素の比喩性と慣用句の具象性の二つがある。つまり、文字通りの意味によるもののみならず、構成要素の意味によるものも考慮すべきである。そのため、この二つの要因を考慮した上で、慣用句の透明度と慣用句の意味推測における透明度要因を再検討する必要がある。

3. 研究課題

以上の先行研究を踏まえ、本研究は王 (2021)¹のデータを用い、これに慣用句の意味生成に関わる要因 (構成要素の比喩性による意味拡張と慣用句の具象性による意味拡張) を加えて慣用句の透明度と慣用句の意味推測における透明度要因を考察する。

そこで、本研究は以下のように研究課題を立てる。

研究課題1. 慣用句の意味拡張は慣用句の透明度とどのように関係するか。

研究課題2. 意味推測の成功が透明度だけで説明できないのはなぜか

4. 研究方法

4.1 対象項目

陳 (2018) は日本語母語話者を対象者として、慣用句の文字通りの意味と慣用的な意味を提示した上で、慣用句の透明度を判断してもらった。その調査結果、透明度の高いものから低いものまでの順にリストにまとめた。

王 (2021) は、陳 (2018) のリストを援用し、中国人日本語学習者を対象者として、透明度要因とL2習熟度要因が慣用句の意味推測に与える影響を検証した。その結果、L2習熟度に関わらず、透明度の高い慣用句は透

明度の低い慣用句より推測しやすいことがわかった。

本研究は、王（2021）の研究結果をもとにするため、王が援用した陳（2018）の慣用句を対象項目にし、それらの透明度と意味推測テストの正答率を分析する。

表2は対象項目を透明度の高い群と低い群に分け、それぞれの正答率をまとめたものである。

表2 対象項目の正答率（透明度の高い順）

	対象項目	正答率		対象項目	正答率
透明度の高い慣用句	神経が高ぶる	74.75%	透明度の低い慣用句	手が塞がる	32.32%
	耳に残る	61.62%		肩を落とす	23.23%
	目を背ける	40.40%		顎で使う	27.27%
	目が留まる	45.45%		肝を冷やす	24.24%
	頭に入れる	66.67%		尻に敷く	3.03%
	身に沁みる	20.20%		心を許す	9.09%
	目を疑う	44.44%		目が肥える	26.26%
	口を揃える	63.64%		肩を持つ	9.09%
	耳に入る	79.80%		手が込む	6.06%
	神経を使う	24.24%		顔を立てる	18.18%

透明度の高い慣用句に属するものは、陳（2018）のリストのうち、透明度が平均値以上の慣用句から選出したもので、透明度の低い慣用句に属するものは、透明度が平均値以下の慣用句から選出したものである²。

4.2 分析方法

本研究の対象項目となる慣用句は全て「身体部位詞+助詞（が・を・に・で）+動詞」のように構成されるため、本稿は身体部位詞を構成要素N、動詞を構成要素Vと称し、意味拡張を「 \uparrow 」で表す。

伊藤（1999）で言及しているように、慣用句の慣用的な意味の成立は、「構成要素の比喩性」と「慣用句の具象性」に関わる。「構成要素の比喩性」が関与する場合、語レベルの構成要素が比喩的に拡張する（ $[N \rightarrow N']$ 、 $[V \rightarrow V']$ ）。「慣用句の具象性」が関与する場合、句レベルの文字通りの意味が表す行動や状態が具象化されてから意味が拡張する（ $[N+V \rightarrow [N+V]']$ ）。

本研究は伊藤（1999）の理論を援用するが、慣用的な意味の成立を支える動機づけはメトニミーなどの比喩であるため、認知言語学の考えを援用し、比喩性、具象性という用語の代わりにこれらを「意味拡張」としてひとまとめにする。「構成要素の比喩性」による意味拡張を「語レベルの意味拡張」、「慣用句の具象性」による意味拡張を「句レベルの意味拡張」とする。慣用句の意味拡張が発生する段階（語レベルなのか句レベルなのか）と回数、つまり、意味拡張の類型を整理した上で、対象項目となる慣用句の意味拡張はそれぞれどの類型に該当するかを内省的に分析する。そして、具体的な正答率を参考にしながら、慣用句の意味拡張の類型が透明度の判断、及び意味推測における透明度要因にどのような影響を与えているかを検討する。

5. 研究結果

「N+V」のような構成を持つ慣用句の意味拡張は、表3に示した7通りの場合がありうる。

表3 慣用句の意味拡張の分類

	類型	意味拡張
①	N'+V	片方の構成要素の意味が拡張する
②	N + V'	
③	N'+V'	両方の構成要素の意味が拡張する
④	[N + V]'	文字通りの意味が拡張する
⑤	[N'+V]'	片方の構成要素の意味が拡張したうえ、その意味が拡張する
⑥	[N + V']'	
⑦	[N'+V']'	両方の構成要素の意味が拡張したうえ、その意味が拡張する

類型①、類型②、類型③は、「語レベルの意味拡張」だけが慣用句の意味拡張に関与している。類型①と類型②は片方の構成要素の意味、すなわち構成要素Nの意味、もしくは構成要素Vの意味が拡張している。類型③は構成要素Nと構成要素Vの両方の意味が拡張している。

類型④は、「句レベルの意味拡張」だけが慣用句の意味拡張に関与している。句が表す行動や状態は文字通りの意味で、句全体が一つのまとまりとして慣用的な意味に拡張する。

類型⑤、類型⑥、類型⑦は、「語レベルの意味拡張」と「句レベルの意味拡張」の両方が慣用句の意味拡張に関与している。類型⑤と類型⑥は構成要素Nの意味あるいは構成要素Vの意味が拡張した上で、さらにその意味が拡張している。類型⑦は構成要素Nの意味と構成要素Vの意味の両方が拡張した上で、さらにその意味が拡張している。

内省分析によって、各対象項目の意味拡張の類型は表4のようにまとめることができる。

表4 各対象項目の意味拡張の類型と回数

透明度の高い対象項目				透明度の低い対象項目			
対象項目	意味拡張			対象項目	意味拡張		
	類型	回数			類型	回数	
神経が高ぶる	①	N'+V	1	手が塞がる	④	[N + V]'	1
耳に残る	①	N'+V	1	肩を落とす	④	[N + V]'	1
目を背ける	①	N'+V	1	顎で使う	④	[N + V]'	1
目が留まる	①	N'+V	1	肝を冷やす	④	[N + V]'	1
頭に入れる	④	[N + V]'	1	尻に敷く	④	[N + V]'	1
身に沁みる	④	[N + V]'	1	心を許す	⑦	[N'+V]'	3
目を疑う	①	N'+V	1	目が肥える	③	N'+V'	2
口を揃える	①	N'+V	1	肩を持つ	④	[N + V]'	1
耳に入る	①	N'+V	1	手が込む	⑦	[N'+V]'	3
神経を使う	④	[N + V]'	1	顔を立てる	③	N'+V'	2

「透明度の高い対象項目」には、「句レベルの意味拡張」だけが関与する類型④【[N+V]'】に属する慣用句もいくつかあるが、大半は「語レベルの意味拡張」が1回発生する類型①【N'+V】に属する慣用句である。「透

明度の低い対象項目」には、「句レベルの意味拡張」だけが関与する類型④【[N+V]】がやや多いが、それ以外に、「句レベルの意味拡張」を含む類型⑦【[N'+V']】が2つ、「語レベルの意味拡張」が2回発生する類型③【N'+V'】が2つ含まれる。

6. 考察

6.1 研究課題1の考察

研究課題1では「慣用句の意味拡張は慣用句の透明度とどのように関係するか」について検討する。

慣用句の透明度は句の「文字通りの意味」と「慣用的な意味」との間の関連性を示す。つまり、透明度とは、句全体の「文字通りの意味から慣用的な意味への意味拡張」を意味し、「句レベルの意味拡張」だけが関与する類型④に該当するはずである。しかしながら、表4の結果から見ると、類型④、すなわち「句レベルの意味拡張」だけではなく、構成要素の「語レベルの意味拡張」が関与する類型①、類型③、類型⑦も存在する。このような結果になったのは、陳(2018)で透明度の判断が母語話者によって心理的、直感的に行われたためである。陳では母語話者が文字通りの意味と慣用的な意味の両方が提示され、その上で透明度を判断したが、その際彼らは「語レベルの意味拡張」も「句レベルの意味拡張」として認識してしまっている可能性がある。つまり、たとえ構成要素が意味拡張する慣用句でも、それを「句レベルの意味拡張」として判断していることになる。

なお、各対象項目の意味拡張の類型を全体的に見ると、透明度の高い慣用句には類型①と類型④が見られ、全て意味拡張の回数が1回である。このうち、「語レベルの意味拡張」だけが関与する類型①は「句レベルの意味拡張」だけが関与する類型④より数が多い。その一方で、透明度の低い慣用句には意味拡張の回数が2回の類型③と、3回の類型⑦が見られる。また、類型のほとんどが「句レベルの意味推測」が関与するもので、1回の「語レベルの意味拡張」だけが関与する類型①と類型②は見られない。つまり、「語レベルの意味拡張」が関与する慣用句や意味拡張の回数が比較的少ない慣用句は透明度が高いと判断される傾向がある。

「語レベルの意味拡張」だけが関与する対象項目のうち、最も透明度の高い対象項目は「神経が高ぶる」で、最も透明度の低い対象項目は「顔を立てる」である。

「神経が高ぶる」という慣用句は、文字通りの意味は「脳の中の神経という器官の気分が高まる」で、慣用的な意味は「興奮した状態になる」である。構成要素N「神経」から「興奮」に意味拡張し、構成要素V「高ぶる」がそのまま保留され、「語レベルの意味拡張」が1回発生する類型①【N'+V'】にあたる慣用句である。それに対し、「顔を立てる」という慣用句は、構成要素N「顔」が「人の面子」に意味拡張し、構成要素V「立てる」が「倒れないように立たせる」ことによって「失わせない」という意味に拡張する。この慣用句は「語レベルの意味拡張」が2回発生する類型③【N'+V'】にあたる。同じく「語レベルの意味拡張」だけが関与するが、「顔を立てる」は意味拡張の回数が2回のため、透明度が低いと判断された可能性がある。

また、「神経が高ぶる」の場合、「神経」は元来興奮を伝える器官で、関連性が高く、「神経」から「興奮」を想起しやすい。意味拡張の度合いが小さいため、母語話者はこの慣用句の透明度が高いと判断したと考えられる。

その一方で、「顔を立てる」の場合、構成要素N「顔」から「面目」を想起するのはそれほど難しくないが、構成要素V「立てる」から「失わせない」を想起するのは困難を伴う。つまり、「顔を立てる」という慣用句は「語レベルの意味拡張」だけが関与するが、意味拡張が2回発生した上に、構成要素Vの意味拡張の度合いが大きい。このような理由により、母語話者はこの慣用句の透明度が低いと判断した可能性が考えられる。

6.2 研究課題2の考察

研究課題2では「意味推測の成功が透明度だけで説明できないのはなぜか」について考察する。

意味推測テストの正答率が最も高い項目は「耳に入る」で、透明度の高い群に属する。慣用的な意味は「情報が聞こえる」で、いわゆる聞こえた内容が耳の外から中へ入ると解釈される。構成要素V「入る」の意味はそのまま保留され、構成要素N「耳」の意味は「音を聞く器官」から「情報を聞く器官」に拡張する。つまり、「耳に入る」という慣用句は、「語レベルの意味拡張」が1回発生する類型①【N'+V'】にあたる。耳は元来音を聞く働きをする器官で、文字通りの意味の普遍性も高く、構成要素N「耳」から「聞こえた音や情報」を想起する

にはそれほど支障が生じない。すなわち、「耳に入る」という慣用句の場合、「語レベルの意味拡張」が1回発生し、意味拡張の度合いが小さい。このような慣用句は慣用的な意味を導き出しやすいため、学習者にとって推測しやすいと考えられる。

それに対し、意味推測テストの正答率が最も低い項目は「尻に敷く」で、透明度の低い群に属する。慣用的な意味は「妻が自分の意に夫を従わせて思うままに振る舞う」で、いわゆる妻が夫を座布団のように扱い、臀部が座布団に力を加えるように圧迫、支配すると解釈され、「尻に敷く」という行動の実際のイメージから拡張したものである。つまり、「尻に敷く」という慣用句は、文字通りの意味の表す行動が具象化され、「句レベルの意味拡張」が関与する類型④【[N+V]’】にあたる。文字通りの意味から「座布団」を想起する可能性があるが、夫婦関係という場面に限定されるため、「妻が夫を座布団のように敷いて座る」という場面を想起しなければ慣用的な意味に辿り着くことができない。この慣用句の意味拡張は1回だけ発生するが、文字通りの意味をもとに、ある具体的な場面を特定しなければならない。このような特定は容易でなく、意味拡張の度合いが極めて大きいため、このような慣用句は学習者にとって推測しにくいと考えられる。

次に、母語話者が判断した透明度だけでは学習者の意味推測の正答率が説明しきれない対象項目について考察する。表5はそのような慣用句をまとめたものである。

表5 例外的対象項目

	対象項目	意味拡張の種類	全員正答率
透明度の高い群	神経を使う	④ [N + V]’	24.24%
	身に沁みる	④ [N + V]’	20.20%
透明度の低い群	目が肥える	③ N’ + V’	26.26%
	顎で使う	④ [N + V]’	27.27%
	手が塞がる	④ [N + V]’	32.32%

透明度の高い群に属する例外的対象項目は二つある。透明度の高い群において、「神経を使う」、「身に沁みる」の正答率は他の対象項目より明らかに低い。母語話者はこれらの慣用句を透明度が高いと判断したが、学習者にとっては、正しく意味推測することは困難なものであった。

「神経を使う」という慣用句の慣用的な意味は「気を緩めない」で、正しく意味を推測するには、「神経を使い興奮状態にさせる」ことから、「集中力を高める」という意味に拡張させる必要がある。「句レベルの意味推測」によって慣用的な意味が成り立ち、類型④【[N+V]’】にあたる。

「身に沁みる」という慣用句も同じように、文字通りの意味から「外部からの刺激が体の中に深く入り込む」ほどに「体が物事を深く感じる」という意味拡張に成功しなければ、「しみじみ感じる」という慣用的な意味は導き出すことができない。同じく「句レベルの意味推測」によって慣用的な意味の成立に関与し、類型④【[N+V]’】にあたる。

意味拡張の種類から見れば、同じ透明度の高い群に属する対象項目の多くは「語レベルの意味拡張」が関与するもので、「神経を使う」と「身に沁みる」は「句レベルの意味拡張」が関与するものである。「語レベルの意味拡張」は「句レベルの意味拡張」より推測しやすいと見受けられ、学習者の意味推測は慣用句の意味拡張の種類に影響される可能性がある。

なお、この二つの慣用句は、「尻に敷く」という慣用句と同様に、文字通りの意味が表す行動が具象化され、その上で句全体が慣用的な意味に拡張し、「句レベルの意味拡張」が関与する類型④【[N+V]’】にあたるが、意味拡張の度合いが異なる。「尻に敷く」という慣用句は夫婦関係という特定の場面を想定しなければならず、「神経を使う」と「身に沁みる」はそのような場面の限定がない。つまり、「尻に敷く」という慣用句は意味拡張の度合いが非常に大きく、推測が極めて難しい。それに比べると「神経を使う」と「身に沁みる」は、比較的意思拡張の度合いが小さく、推測しやすい。母語話者は文字通りの意味と慣用的な意味の両方を知ったうえで透明度を判断したため、「神経を使う」と「身に沁みる」は透明度が高く、「尻に敷く」は透明度が低いと判断した。し

かしながら、「神経」と「身」は、身体の中にある器官あるいは体を指し、他の慣用句に含まれていた「耳」、「目」、「頭」、「口」などの身体部位に比べると、身体機能が一つに定まらず、特定しにくい。学習者にとって、このような身体部位詞を含む慣用句は「尻に敷く」ほど意味推測が困難ではなかったものの、慣用的な意味を正しく推測することは依然として難しかったと考えられる。

その一方で、透明度の低い群に属する例外的対象項目が三つある。透明度の低い群において、「目が肥える」、「顎で使う」、「手が塞がる」の正答率は他の対象項目より明らかに高い。母語話者はこれらの慣用句を透明度が低いと判断したが、学習者にとっては、慣用的な意味を正しく推測することがそれほど難しくなかった。以下より、詳述する。

まず、「目が肥える」という慣用句の慣用的な意味は「よしあしを見分ける力が増す」で、いわゆる鑑賞力が上がると解釈される。構成要素Nの意味は「目」から「鑑賞力」に拡張し、構成要素Vの意味は「太る」から「(目の)能力が上がる」に拡張している。この慣用句は「耳に入る」という慣用句と同様に、「語レベルの意味拡張」に基づき、慣用的な意味が成り立っているが、構成要素N「目」のみならず、構成要素V「肥える」も同時に意味が拡張している。つまり、「目が肥える」という慣用句は、「語レベルの意味拡張」が2回発生する類型③【N'+V】にあたる。この慣用句は「耳に入る」より意味拡張が発生する回数が多いため、比較的推測しにくい。類型④ではないが、意味拡張が2回発生するため、母語話者はこの慣用句の透明度が低いと判断したのであろう。

このように、「目が肥える」の意味を推測するのは一見容易ではないように思われるが、目という身体部位は元来鑑賞する働きを持ち、鑑賞という意味を想起しやすく、肥えるという動詞は太るという意味で、肥満度が上がるとイメージしやすい。それぞれの意味拡張、すなわち「目」から「鑑賞力」、「太る」から「(能力が)上がる」という意味拡張は学習者にはそれほど困難ではなく、比較的高い正答率を示したと思われる。

次に、「顎で使う」という慣用句の慣用的な意味は「傲慢」で、これは人を使うのに口(言葉)で指示をするのではなく、顎を上げる仕草をして指示することから、そのような解釈が生まれたと思われる。この慣用句は「句レベルの意味拡張」によって慣用的な意味が成立し、類型④【[N+V]']にあたる。また、文字通りの意味「顎で人を使う」と慣用的な意味「傲慢な態度で人を使う」はかなり乖離しており、意味拡張の度合いが大きい。そのため、母語話者は透明度が低い慣用句と判断した。しかしながら、中国語には「颐指气使(頤指気使)」という成語が存在し、慣用的な意味は「顎で使う」と同じく「傲慢」の意味を示す。「颐(頤)」という漢字の意味は古代中国語に「顎」と解釈され、日本語の「顎」という語彙の概念が共通している。また、「颐指(頤指)」は「顎で人を使う」という意味で、「顎で使う」の文字通りの意味と一致している。学習者が「颐指气使」という中国語の成語の意味を想起し、それをもとに「顎で使う」という日本語の慣用句の意味を推測していたと考えられる。つまり、慣用句の構成要素に同じ漢字が使われていないが、母語に共通する概念が存在していたため、それを手がかりに意味推測が行われた。学習者にとって、このような慣用句は比較的意味推測しやすいと思われる。この結果について、脇川(2014)も同じような結果を示した。脇川は韓国人日本語学習者を対象者として、母語要因とL2習熟度要因が慣用句の意味推測に与える影響を考察した。その結果、学習者の母語と形式が対応する慣用句ではなくても、概念が対応すれば、L2習熟度にかかわらず、意味推測がより容易になることが明らかになった。

そして、「手が塞がる」という慣用句は、「手が物でいっぱいになっている」ので他のことに手を使うことができないと解釈され、「他のことができない状況である」という慣用的な意味が生まれており、「句レベルの意味拡張」によって慣用的な意味が生じたと考えられる。つまり、この慣用句は類型④【[N+V]']にあたる。「手が物でいっぱいになっている」という文字通りの意味が表す状態と、実際に「手を使う」という動作が異なるため、母語話者は直感でそれらの関連性が低くて透明度が低いと判断した可能性がある。しかしながら、妻が夫を座布団のように扱って夫の上に座るといふ、かなり特別な状況を想定しなければならない「尻に敷く」のような慣用句に比べると、「手が塞がる」という慣用句では、文字通りの意味が表す状態「手が物でいっぱいになっている」から「忙しくて他のことができない」という意味を拡張させることは比較的容易で、意味推測も容易だったと考えられる。「句レベルの意味拡張」によって慣用的な意味が生じる慣用句の意味推測は、文字通りの意味と慣用的な意味とのつながりを補完し、拡張関係を成立できたら意味推測に成功するが、それが難しい場合には意味推測に成功しにくいのであろう。

7. おわりに

7.1 本研究のまとめ

本研究は慣用句の意味拡張と透明度の関係、また慣用句の意味拡張と意味推測における透明度要因の影響との関係を考察した。

研究課題1の考察からは、慣用句の意味拡張は透明度の判断に関係することを明らかにした。母語話者が判断した慣用句の透明度は、心理的かつ直感的に判断したもので、本来は「句レベルの意味拡張」によって理論的にも判定されなければならないと思われるが、「句レベルの意味拡張」以外に「語レベルの意味拡張」が伴うものなど様々な場合があることがわかった。透明度の判断は事実上意味拡張の度合いを判断することで、意味拡張のレベルと回数に影響されることが明らかになった。また、「語レベルの意味拡張」だけが関与する慣用句は透明度が高いと判断され、意味拡張の回数が少ない慣用句も透明度が高いと判断される傾向が見られた。

研究課題2の考察からは、慣用句の意味拡張の度合いは透明度要因と同じく、慣用句の意味推測の正答率に影響することを明らかにした。この他、構成要素である身体部位の身体機能や、母語に関わる要因も慣用句の意味推測に影響すると考えられる。「身に沁みる」のように、透明度の高い慣用句でも、身体機能が特定しにくい身体部位詞を構成要素とする慣用句は意味推測がよりしにくい。また、「顎で使う」のように、慣用句の構成要素に同じ漢字が使われていなくても、学習者の母語に共通する概念が存在すれば、正の転移の作用により意味推測がしやすくなる。

7.2 本研究より得られた示唆と残された課題

慣用句の意味推測における透明度要因を考察した実証研究は、透明度が意味推測に影響を与えると示唆したが、例外的対象項目は分析していない。本研究はそれらに着目することで、慣用句の意味推測に関する議論に新たな視点を提示したと言えよう。

また、本研究は慣用句の意味拡張の類型を提示することができた。慣用句の慣用的な意味が成り立つ要因として、「語レベルの意味拡張」と「句レベルの意味拡張」が議論されたが、それに後続する研究が行われていなかった。本研究はそれらを発展し、それらが慣用句の意味拡張の度合いに影響を与える可能性を提示した。しかしながら、意味拡張が発生する段階と回数は筆者が一人で内省により行ったもので、その信憑性が問われる。それらがどのように慣用句の意味拡張の度合いに関係するかをさらに検討する必要がある。

【註】

1. 文脈が利用できる場合、L2習熟度の高い学習者のほうがより文脈からの情報を上手に使い、慣用句の意味を正しく理解する (Ishida 2009)。王 (2021) は、文脈なしの場合における慣用句の意味推測の実証研究を補完するものとして、このような状況で慣用句の透明度と学習者のL2習熟度との関係が慣用句の意味推測に与える影響を検討した。その結果、交互作用が見られた ($F(1,97) = 4.107, p < .05$)。また、透明度による影響が見られたもの ($F(1,97) = 304.903, p < .01$)、L2習熟度による影響が見られなかった ($F(1,97) = 3.253, p > .05$)。本研究は透明度要因を質的に分析するもので、透明度による影響に関する結果だけを取り上げた。
2. 母語の慣用句と対応しない慣用句は母語を手がかりとして意味を推測することが困難で、意味推測の際に透明度に影響されると考えられる。そこで、王 (2021) は中国の大学院で翻訳を専門とする大学院生1名の協力のもとに、対象項目を選出した。中国語に同じ構成要素からなる中国語の慣用表現があれば、それを除外した。また、文字通りの意味が身体部位を使った動きとして説明できるものも除いた。日中慣用句の対照比較の詳細は王 (2021) を参照されたい。

【参考文献一覧】

- 有蘭智美 (2014) 「<物事との関与>を表す表現の意味の成立—「手」, 「足」の慣用句」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』25(2), 79-95.
- 伊藤真 (1999) 「慣用句の意味の成立要因について」『Rhodus: Zeitschrift für Germanistik』15, 185-197.
- 王雪瑤 (2021) 「中国人日本語学習者の慣用句の意味推測—透明度要因とL2習熟度要因による影響に着目して—」『中国語話者のための日本語教育研究』12, 79-93.

王 慣用句の意味推測における透明度要因に関する一考察

国広哲弥 (1985) 「慣用句論」『日本語学』4, 4-14.

陳雯 (2016) 「慣用句の透明度と親密度の関係について—日本語母語話者と学習者判断の比較から—」『筑波応用言語学研究』23, 15-30.

陳雯 (2018) 「日本語慣用句の記述的規範—300個の動詞慣用句の親密度・透明度・予測性—」『言語学論叢 オンライン版』11, 20-45.

榎山洋介 (1997) 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』80, 29-43.

森山新 (2017) 「コーパスを用いた日本語基本多義動詞「切る」の意味構造分析—認知意味論の観点から—」『人文科学研究』13, 55-67.

脇川友恵 (2014) 「身体部位慣用句の意味推測における第二言語習熟度の影響—母語と第二言語間の言語形式と概念の対応に着目して—」『日語日文学』61, 239-258.

Gibbs, R. W., Nayak, N. P. & Cutting, C. (1989) How to kick the bucket and not decompose: Analyzability and idiom processing. *Journal of memory and language*, 28(5), 576-593.

Ishida, P. (2009) The effect of transparency on L2 idiom interpretation. *Tsukuba journal of applied linguistics*, 16, 15-30.

Nippold, M. A. & Taylor, C. L. (2002) Judgments of idiom familiarity and transparency. *Journal of Speech, and Hearing Research*, 45, 384-391.